

平成二十一年度後期日程 入学試験問題

小論文 B

人文学部 社会科学科

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 解答は、解答用紙の指定の欄に縦書きで記入しなさい。解答用紙(その一)には問一、問二の解答を、解答用紙(その二)には問三の解答を記入すること。
- ③ 受験番号は、解答用紙(その一)(その二)の指定の欄に記入しなさい。

次の文章を読んで、問一、問二、問三に答えなさい。

★ワーキングプアの「発見」

〔一行略〕

ワーキングプアとは、働く貧困者＝働いてもなお貧しい人というほどの意味だろうが、テレビ番組が取り上げたこともあって、フリーター、ニートと並んで、一躍時代の言葉となった感がある。^①もしかすると、これが貧乏とか貧困という伝統的な日本語と同じ意味だとは思えない人もいるかもしれない。

それはともあれ、ワーキングプアに注目が集まったのは、まじめに働いているのに、なお貧しいということに世間が驚いたということであろう。逆に言うそれは、高齢や病気、障害などで働けない人や怠けて働かない人だけに貧困が見られるという感覚を多くの人が持っている、ということだろう。

おまけに、つい最近まで日本では、その気になれば働く場はどこにでもあると皆が信じてきたので、その気になっているのに働く場がなかったり、働いても貧しいというようなことは想像しにくく、そのこともワーキングプアという現象への驚きとなって現れたのかもしれない。

だが、ワーキングプアという言葉は、ニートなどと違って、実は新しい言葉ではない。1世紀以上も前に、ふつうに雇用され、毎日働いている人々の中にも貧困があることがいくつかの調査によって「発見」されている。その最も有名な調査の一つが、20世紀に入ろうとする頃、チャールス・ブースという人が英国の首都ロンドンで行ったものである。

この人は大実業家であったから、資本主義が確立し発展することによって、人々の生活は向上していくと考えていた。だが、当時盛んになってきた社会主義運動が貧困の拡大を強調するので、これを実際の調査によって確かめようとしたわけである。

彼はまずスラムとして有名であつた東ロンドン地区で調査をし、その35%が貧困者、そのうち12・5%が極貧者という結果を得た。さらにブースはロンドン全体に調査対象を広げ、これらスラムとはいえない地域も含めて、ロンドン市民の30・7%が貧困者であることを、彼の意に反して明らかにしてしまつた。

ブース自身にとつても社会にとつても驚きであつたのは、この30・7%の大部分が雇用されている労働者で、雇用が不安定であるか、常雇いの労働者であつても賃金が低いため貧困であるという事実だつた。

調査当時のイギリスでは、貧困は都市の雑業(たとえば屑拾いや露天商、内職など。しばしばインフォーマル部門と呼ばれる)などでその日暮らしをしているようなスラムの住民や「浮浪者」のものと理解されていた。チャールズ・デイケンズの小説に出てくるような貧民街のイメージである。たとえば『オリバー・ツイスト』において、少年オリバーがはじめてロンドンに来たときに通じかかつたスラムは「これほど汚くて惨めな街は見たこともなかつた」ほどであり、救貧院(貧しい人びとを収容する施設)出身の孤児であつたオリバーをして、「逃げた方がよくはなかつたか」と思わせるような場所であつた。

日本でも明治の頃には貧民窟探訪記が競つて書かれたが、スラムには普通とは異なる人々の生活があるからこそ、探訪すべきところとされていたのである。

ところがブースの調査では、一般の市民とは別の世界の人々の貧困、あるいは近代の工業制度の外にあつて、雑業などでその日その日を生きているような貧困は数から言えば少なく、むしろ近代工業制度の内側により多くの貧困が、スラムにもまたスラムの外にも広がっていることが明らかになつたわけである。

このブースの調査に刺激を受けたシーボーム・ラウントリー(ヨーク市のチョコレート会社の御曹司)も自身のホームグラウンドで同様の調査を行い、貧困な人々の割合を27・84%と計算している。ラウントリーはブースと手紙のやりとりをして、いろいろな示唆を得ていたらしいが、ロンドンという大都会と地方都市の違いがあること、またヨーク市調査の時期はロンドン調査の時よりも景気が良かったことなどから、このように高い貧困割合になるとは思つてもみなかつたようだ。

「私の調査は、あらかじめ想定した理論を実証的に確かめようとして出発したのではなく、単なる具体的事実を確かめるために行われたものであるが、その結果がブース氏の調査結果とあまりにも近似していたので、私自身、少なからず驚いた次第である」と書き残している。

ラウントリーは36年後に同じ調査を行い、その時も31・1%が貧困であることを見いだしたが、同時に、年齢グループによって貧困割合が異なることに注目した。ここから彼は、「特別な熟練をもたない労働者の場合、失業しなくとも人生で3回貧困に陥る危険がある」という、貧困と労働者家族のライフサイクルに関する有名なモデルに行き着くことになる。

3回の貧困の危険とは、次の三つのライフステージで生じる。1回目は自分が子どもだった時代、2回目は結婚して自分の子どもを育てている時代、3回目は子どもが独立し、自分がリタイアした高齢期である。

つまり、1回目と2回目は、いずれも子どもの扶養費が拡大して生活費を圧迫する時期、3回目は子どもたちが独立し、自分は労働市場からリタイアして収入が途絶えるか低下する時期である。

このライフサイクル・モデルは、劣悪な雇用・労働条件によつて貧困の危険にさらされるだけでなく、労働者は子どもの扶養期や老後の生活においても貧困に陥る可能性があることを示して、年金や児童手当などの社会保障の基礎となった。このモデルは、生命保険会社などが勧める生活設計などにも使われていることは周知のところであろう。

このようなわけで20世紀以降の貧困は、19世紀まで好んで描かれていた大都市の「貧民社会」のそれとは異なり、工業社会のワーキングプアの問題であることが広く認識されるようになった。そしてこの認識から、労働者にとつての貧困の予防策の体系化、すなわち今述べたような年金や児童手当などを含む福祉国家の構想が生まれたのである。

ところが、福祉国家の構想が実施に移された後もワーキングプア問題は終わつたわけではなかった。欧米では、福祉国家が整備された後も、ワーキングプアを含めた貧困をくり返し「再発見」する動きがあり、それが政治の焦点となつて新しい福祉政策への転換が図られていった。たとえばアメリカではジョンソン大統領の時代(1963—69)に「貧困との戦争」宣言がなされ、同時期のイギリスでも、貧困研究者ピーター・タウンゼントらが「貧困の再発見」といわれる調査結果を発表して、政府に政策変更を迫った。

★新しい貧困と社会的排除の「再発見」

さらに1980年代の欧米では、これまでの貧困とはだいぶ様相の異なる新しい貧困の「再発見」に注目が集まっていた。それは従来の労働者家族や高齢者の貧困というよりは、学校を出たばかりの、あるいはそこから落ちこぼれた若年単身者の長期失業、ファストフードや家事サービス、警備、娯楽サービスなどの新しいサービス産業に不安定な待遇で従事する女性や母子家庭、移民層などの貧困の「再発見」である。

しかもこれらの貧困は、ホームレスのような極端な形をとったり、都市の周縁部に集住したりすることが少なくないため、人々の目にはまるで19世紀までのスラムのような「貧民社会」の再現、「もう一つの社会」の出現のように映った。この新しい貧困は、ヨーロッパでは「社会的排除」、アメリカでは「アンダークラス」などという言葉で呼ばれて、再び政治課題となったのである。社会的排除については：「中略」：、雇用関係や福祉国家の諸制度からも排除されているという意味で、貧困に代わって使われた言葉である。また、アンダークラスとは、文字通り、スラムのような「下層社会」の再現を示した言葉である。

こうした新しい貧困の出現は、80年代以降明確になったポスト工業社会とかグローバルバリゼーションといわれる新しい社会経済体制への移行の過程で顕著になったといわれている。つまり、ブースやラウンダリーが調査を行った工業社会から、金融や情報、さまざまな消費者向けサービスを中心とする新しい産業社会へと移行する中で、新しい貧困が生まれたのである。言葉^(注)を換えればそれは、市場がグローバル化し、競争が激化する中で非正規雇用が急増し、下請けなどアウトソーシングが拡大する過程で生み出されたと言えるであろう。

この新しい産業社会では、金融や情報サービス産業で専門知識を武器に働く人々と、「マクドナルド・プロレタリアート」などと形容される、安い賃金と不安定な雇用で働くサービス労働者に二極分化しつつあるという。

ヨーロッパではこの二極化をAチームとBチーム、一流国民と二流国民などと呼んでいる。こうした呼び方はさしあたり格差の拡大を示すものだが、それに加えてBチームや二流国民と名指された人々が陥った貧困を、「社会的排除(social exclusion)」という概念によって「再発見」することを強く促したのである。

これは、ラウントリーがモデル化した工業社会の労働者のライフサイクルをもとにして作られた従来の福祉国家の限界を示すものであり、ポスト福祉国家の新たな理念の模索が始まっていることを示している。

たとえば、社会から排除されている人々を再び社会の中へと引き入れて、社会の二極化を克服する社会的包摂(social inclusion) 排除のない社会への包摂」という理念や、従来の所得保障中心の福祉(welfare)から、若年失業者を再び労働市場へ参入させようとするワークフェア(workfare)労働機会の提供による福祉の実現への転換の強調などがそれであり、いずれも、この新しい貧困の克服を課題としている。

† 貧困を忘れた日本

日本では欧米に10年遅れて90年代半ば以降になって、格差社会に遭遇した。「マクドナルド・プロレタリアート」は、日本のフリーターの姿でもある。今日のフリーターやパートタイム労働者は、単に非正規雇用であるだけでなく、事実上日雇のような、きわめて不安定な雇用関係に置かれることが少なくない。

就職情報誌などで見る「激短&日払い」「掛け持ちOK!!」「1日だけでもOK」といった短期就業の場合は、もし、その収入だけで暮らしていくとすれば、それらの短期就業を日々つなぎ合わせていくような綱渡りか、一日のうちに二つか三つの仕事に就くことを余儀なくされることだろう。むろん、そうした綱渡りや二重就業が、いつも保障されているわけではないから、そうした働き方では暮らしていけない人々が生まれてくるのは必然である。

しかし、不思議なことであるが、日本では格差社会論はあるが、これまで本格的な貧困論は必ずしも展開されてこなかった。^③所得の格差は、確かに低所得層をあぶり出すが、それはあくまで高所得層に対する低所得層であって、貧困者ではない。ニートやフリーターも、必ずしも貧困問題として議論されているわけではない。

格差があつても別にいいじゃないか、という意見も結構強い。それが今ようやく、ワーキングプアという外来語を介して、貧困が意識され始めたところといえる。どうして日本では、格差社会論が新しい貧困の「再発見」を伴って議論されないのだろうか？

もちろん日本でも、戦前にはスラムの貧困の探索や貧困の「発見」がなされていた。敗戦直後の「国民総飢餓状態」といわれていた時期、貧困は主要な社会問題であつた。

1956年の経済白書は「もはや戦後ではない」という有名なフレーズで戦後の復興をうたいあげたが、同年の厚生白書は「果たして「戦後」は終わったか」と反論し、復興の背後に取り残された人々の貧困を最低生活基準すれのボーダーライン(境界)層として示し、それが972万人存在していることに警鐘を鳴らした。

だがその後は、欧米の福祉国家で見られたような、しつこいほどの貧困の「再発見」とこれへの政策対応をめぐる議論はほとんど起こらなかつた。日本では、高度経済成長と国民皆保険・皆年金体制の確立によつて貧困問題は基本的には解決した、とほとんどの人が信じ、「総中流化」の中で、戦後復興下の格差と貧困に警鐘を鳴らした厚生省(当時)も含めて、きれいさっぱりと貧困問題の追及をやめてしまったのである。

私は、はじめて大学に就職した70年代の半ば、「新しい貧困の意味」という小さな論文を書いて直属の教授に叱られたことがある。貧困のような「古くさいモン」をテーマにすることはまかりならない、というのであつた。ちょうど高度消費社会への転換期にあつたことを考えれば、貧困ではなく、消費者問題や高齢者のケアなどの新しいテーマに向かうのが当然と、教授は考えたのだろう。

例外は、時々思い出したように登場する識者の「清貧」論か、テレビやコミックスのピンボー物語である。めざしを食べていた実業家、戦前・敗戦直後のつましいけれども人情味あふれる生活の賛美、あるいはピンボー脱出をテーマにしたテレビ番組等々。

しかも、テレビや新聞の中ではホームレス問題も一種の「季節もの」であり、たとえば師走や冬季に、路上での厳しい生活を取り上げて、番組表に季節らしさを出すのである。もちろんそれらは、現実の貧困を「再発見」したのではなく、「非日常のファンタジー」であり、いわば「飽食時代のスパイス」(さぶかるウオッチング・日本経済新聞2006.9.16夕刊)にすぎない。

むろん、貧困が問題視されなかったのは、「豊かな」時代になったからだ、と多くの人は言うだろう。まさに貧困の時代から高度消費の豊かな時代に移り変わったのである。これは、もっともらしい説明である。だが、「豊かさ」や中流化の実現、社会保障制度の整備は、他の先進諸国でも同様であった。そして、他の「豊かな社会」、他の福祉国家では、しつこいほどの貧困の「再発見」が行われている。

だから、貧困の「再発見」をしつこくやったか、きれいさっぱり忘れたかは、社会全体の「豊かさ」とは、実は関係がないのである。しつこくやったか、忘れたかの違いは、「豊かさ」の中に潜む貧困を「再発見」しようとする「目」や「声」が社会にあったかどうかにかかっているのではないか。

もちろん、どの国でも政府や経営者団体は、貧困問題を取り上げたがらない。貧困は政治の失敗、市場の失敗を表しているからである。他の先進国で貧困の「再発見」がなされるのは、現政府の失敗をあげつらって政権交代に持ち込もうとする勢力が強いかからだともいえる。

日本では同じ政党の長期政権が続き、おそらくはそれとの関係で、対抗勢力としての野党や労働組合、マスメディア、さまざまな市民団体も、貧困に無関心であった。研究者等の「目」も貧困には向けられず、貧困のただ中にある人々自身の「声」も小さすぎたのではなからうか。

アメリカの地下鉄の中でホームレスの人々が「私はホームレスです」と書いたプレートを首からぶら下げ、コカコーラの紙コップを持って「寄付」を募っていたのを目の当たりにして驚いたことがある。パリでは、路上に座り込んで物乞いをする人々の前を素通りしようとする、「エゴイスト」という非難を浴びせられた。貧困の「再発見」がなされている国々では、貧困者はむしろ自分の貧困を社会の産物として、その解決を社会に訴えているように見える。

これに比べると日本のホームレスも貧しい人々も、信じられないくらいおとなしい。まるで貧困が自分の非であるかのように「声」を出さない。「強い貧困者」にしばしば辟易へきえきしている欧米のメディアから取材を受けると、きまつてなぜ日本のホームレスは「物乞い」をしないのかと不思議そうに聞かれる。私は、「日本のホームレスは労働者としての誇りが強いからだ」と答えることにしていたが、本当は「自分の失敗」として恥じているからなのかもしれない。

ともあれ、こうした経緯のために、格差が広がった社会が眼前に現れても、これを新たな貧困と結びつけて語ろうとする「目」や「声」が日本にはすでになかったといえよう。

なぜ格差ではなく貧困なのか

では、なぜ貧困を「再発見」する必要があるのだろうか？ 格差ではなく、貧困にこだわる必要がどこにあるのだろうか？ これに答えるためには、格差とか不平等という言葉と貧困との違いをはつきりさせておかねばならない。

格差や不平等は、さしあたり「ある状態」を示す言葉である。つまり、ある社会においてAチームにいる人とBチームにいる人とは分かれているとか、高所得の人と低所得の人がいる、というような「ある状態」を示す、記述的な言葉である。そうであるから、格差は、それを問題にすることもできるが、「格差があつてどこが悪い」という開き直りも可能である。あるいは、格差を問題にする場合も、どのような格差が問題か、という問いを別にたてる必要が出てくる。

これに対して貧困は、「社会にとって容認できない」とか「あつてはならない」という価値判断を含む言葉である。また、貧困が「発見」されることによつて、その状態を改善すべきだとか、貧困な人を救済すべきだとか、Bチームの中に広がっている貧困を解決すべきだといった、社会にとつての責務（個人にとつては生きていく権利）が生じる。

たとえば貧困は、「なくすべき」アフリカの飢餓であつたり、学校にも行けないで働かされている子どもたちの「改善すべき状態」であつたり、年金だけでは病院にも行けない高齢者の「良くない状態」であつたりする。だから、そうした状態を「なくす」仕

組みを社会が作り出していくべきだという、社会の責務に(したがって貧困な人々の生きる権利に)直接結びつかざるをえない。19世紀までのスラムの貧困にせよ、20世紀のワーキングプアの発見にせよ、貧困を語ることはこのような価値判断と責務によって特徴づけられるのである。

このように、今日の格差社会を、格差という記述的な言葉のレベルで把握するか、その格差の中に「あつてはならない」状況Ⅱ貧困があり、したがってそれを「なくす」べきだと価値判断するかは、かなり違うことなのである。

格差論だけからは、積極的な解決策も、あるべき社会論も出てきにくい。格差論の延長で「あつてはならない」貧困を「再発見」していくことは、格差がある、格差があつて何が悪い、というような議論を断ち切つて、格差社会の中で何を改善すべきか、私たちの社会をどのように変えていくことが望ましいか、という価値と責務(権利)の問題をわれわれに積極的に投げかけることになる。

岩田正美『現代の貧困——ワーキングプア/ホームレス/生活保護』(筑摩書房、二〇〇七年、一六〇—三〇頁。一部略)

(注) アウトソーシング 企業が業務を外部に委託すること、あるいは部品等を外部から調達すること(出題者)。

問一 著者は、傍線部①で「もしかすると、これが貧乏とか貧困という伝統的な日本語と同じ意味だとは思ひもしない人もいるかもしれない。」と述べているが、それはなぜか。そのように述べる背景を二五〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部②で著者の言う「従来の福祉国家の限界」とは何かを二五〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部③に「日本では格差社会論はあるが、これまで本格的な貧困論は必ずしも展開されてこなかった。」とあるが、著者は、(1)日本で本格的な貧困論が展開されてこなかった理由、および(2)格差社会を論ずることと貧困を論ずることとの違い、をどのように考えているか。(1)については一五〇字以内、(2)については二五〇字以内で説明しなさい。